

# 中学校社会科歴史的分野におけるヨーロッパ史との関わりに関する一試案

鶴木 毅

中学校社会科歴史的分野では、日本の歴史の大きな流れを理解することに主眼が置かれているが、同時に、日本の歴史において、諸外国との接触・交流が日本の社会を大きく変えていく契機となった場面があり、その場面の背景となった世界の動きを理解させることで、世界史的な視野で日本の歴史を見ていく視点を養うことが求められてもいる。幕末から明治にかけて、まさに日本は大変革の時代を迎えていた。ヨーロッパで構築された近代国家システムは強力な国家体制としてアジア諸国を圧倒し、日本もこの国家システムへの変革なしには植民地にされてしまうという危機を迎えていたのである。明治維新とも呼ばれるこの近代化への変革はどのように行われたのであろうか。それを理解するためには、まずその目標となったヨーロッパの近代国家形成の過程と、このシステムの全体像を総合的にとらえる必要がある。そのためにヨーロッパで構築された近代国家システムとは何かを理解するための単元開発を行い、今回、試案として提示した。

## 1. はじめに

中学校社会科歴史的分野では、歴史的分野の理解についての目標として、「我が国の歴史の大きな流れを、世界の歴史を背景に、各時代の特色を踏まえて理解させ」とある。ここには内容構成の原理として2つのものが並列されている。一つは、各時代の特色を理解し、それを時代順に積み重ねていくことによって日本の歴史の大きな流れが理解できるという考えである。各時代の特色は、各時代の政治的、経済的、社会的、文化的構造をそれぞれに網羅し、その時代を総合的にとらえることによって理解しようとする、いわゆる通史学習の原理である。もう一つは、時代ごとに世界との交流があり、その交流を通して諸外国で創造・形成された諸制度や諸文化が日本にもたらされ、それらを取り込むことで、日本に新しい国家体制が整えられ、経済が発展し、新しい社会が形成されたりして、日本は発展してきたという日本の歴史への視点である。こうした日本と諸外国とのつながりや交流を知ることによって、歴史的分野の目標のひとつに設定されている「歴史にみられる国際関係や文化交流のあらましを理解させ、我が国と諸外国の歴史や文化が相互に深くかかわっていることを考えさせるとともに、他民族の文化、生活などに関心をもたせ、国際協調の精神を養う」ことが求められているのである。歴史学習を通して、日本と諸外国とのつながりや交流、そして日本社会の発展を認識させることを通して、他国への関心をもたせ、国際協調の精神を養うことは、国際化の進展という昨今の流れの中で、いっそう重要性が増しているといえる。

## 2. 歴史学習の現状と課題

この新たな課題に対応するには、「世界史の中に日本の歴史をどう位置付けていくか」が問われることになる。そこにはまず日本の歴史を理解するために不可欠となる、諸外国で発生し、日本社会を大きく変容・変動させるような諸制度や諸文化とは何かを確定しなければならない。さらに世界史の流れを理解するのではなく、日本の歴史を理解することが主であるので、諸外国で生じた関連する事象を全て網羅するわけではない。日本の変革に影響を与えた要素を抽出することが求められている。このように世界史の中のどの事象を取り上げればよいのか、それをどのような視点で、またどのようにその内容を編成していくのか歴史学習の課題となる。

この課題に対し、現行の指導要領はどのような教育内容を設定しているであろうか。指導要録の「内容」を一覧すると、(2)「古代までの日本」では、世界の古代文明や宗教のおこり、大和朝廷による統一と東アジアのかかわりなどが設定され、(3)「中世の日本」では、武家政権の成立とその支配が全国に広まることに関連する東アジア世界とのかかわりが設定されている。さらに(4)「近世の日本」では、まずヨーロッパ人來航の背景とその影響が、さらに幕末における欧米諸国の接近が設定され、(5)「近代の日本と世界」では、欧米諸国における市民革命や産業革命、アジア諸国への動きなどを通して、欧米諸国が近代社会を成立させてアジアへ進出したことを理解させることを前提に、明治政府による富国強兵・殖産興業・文明開化などを通して日本の近代化が進んだこと、日本が憲法制定や対外戦争などにより国際的地位を向上させたこと、そして最後に、近代化した日本が第二次世界大戦へと進むなかでの国際社会との関係の変遷が設定され、(6)「現代の日本と世界」では、戦後の日本の再建と国際社会との関係が理解すべき内容として設定されている。

おおまかに整理すると、(2)における世界の古代文明の成立と宗教、(2)(3)における日本の国家形成や社会発展に関わった東アジア諸国（主に中国）との関係、そして(4)(5)における日本の近代化に影響を与えたヨーロッパとの関係を中心に、近代化した日本と近隣諸国との関係が主な内容となっている。この中でヨーロッパとの関係に注目すると、指導要録の教育内容でヨーロッパの近代化について示されているのは、欧米諸国における「市民革命」、「産業革命」、「アジア諸国への動き」の3項目である。

次に、この内容について教科書ではどのような構成になっているであろうか。当校で現在使用している教科書『わたしたちの中学社会 歴史的分野』（日本書籍新書）を見てみると、ヨーロッパに関する単元として「ヨーロッパの世界進出」と「ヨーロッパの近代化と世界」という2つの大単元を組んでいる。「ヨーロッパの世界進出」ではイスラム世界の成立やモンゴル帝国の形成により世界の一体化が進んだという記述の後、中世にローマ教皇を頂点としたカトリック教会がヨーロッパ全体にその勢力を浸透させていたことに對し、台頭した市民階級により、ルネサンスや宗教改革が推進され、カトリック教会の支配が揺らぎ、それに対してカトリック教会側はイエズス会を組織してヨーロッパ以外の地へと布教活動を広げた要因とされている。その後大航海時代の記述が続き、スペインの新大陸進出、ポルトガルおよびスペインのアジア進出が描かれている。日本史との関連では、このヨーロッパの動きを受けて、「武家の全国統一」という単元が生まれ、戦国時代の末、ポルトガル人の種子島漂着、鉄砲の伝来、ザビエルの来日、南蛮貿易といった流れにつながる構成になっている。また、「ヨーロッパの近代化と世界」では「市民革命」の事例としてイギリス革命、フランス革命、アメリカの独立が、「産業革命」の事例としてイギリスの産業革命の概要と労働問題の発生を、「アジア諸国への動き」の事例としてイギリスのインド支配と中国とのアヘン戦争の事例が載せられている。こうしたヨーロッパの近代化を背景に、日本史では「開国」の単元が生まれ、幕末の欧米列強の接近と開国、明治維新という流れにつながる構成となっている。

ところで、高等学校における世界史では、「宗教改革」はどのような単元に位置づけられているだろうか。高等学校の教科書『世界史B』（東京書籍）では、宗教改革は大単元「近世のヨーロッパ」に位置づけられ、ヨーロッパで各国の王権による主権国家体制形成という流れの中で生じた出来事としてとらえられている。中世的な世界観を持ち、全ヨーロッパを支配しようとするカトリック教会と、それと結ぶハプスブルグ家。それに対し自立を強める各国の王権がカトリック教会・ハプスブルグ家からの分離・自立を求めて、王権神授説を唱え、ルターやカルバンの思想を根拠にカトリック教会の支配から国内の教会を分離させ、修道院を解散させる動き

をとったのである。

中学校における宗教改革の位置づけと比べると、大きな違いがあるのがわかる。中学校では、宗教改革はイエズス会の目的を説明するために、さらには、江戸時代のキリスト教禁止や鎖国とのかわりの中で、ポルトガル・スペインはカトリック国、オランダ・イギリスは新教国という両勢力の宗教的な区別を説明するために必要な出来事として説明されているに過ぎず、それ以上の説明はなされない。それに対し、高等学校における宗教改革は、主権国家体制確立のための政治的動きという、近代国家システム構築に向かう重要な要因の一つという位置づけになっている。この主権国家は19世紀にはいると、フランス革命などを経て、国民国家体制へと発展することになる。つまり、宗教改革は近代国家形成への重要な転換期の出来事だとされているのである。

ヨーロッパで形成された、基本的に民族によって構成される国民国家は、国民の力を結集させることで強大な国力を発揮することが可能となり、ヨーロッパ諸国の世界進出を支えた近代国家システムであった。また、このシステムは、ルネサンス、宗教改革、絶対王政、市民革命、産業革命など様々な変革を経て、システムの構築に数世紀の年月をかけ、ようやく形成することができたものである。こうして世界を席卷することになるヨーロッパに對し、ヨーロッパ以外の国々は、この新しい国家システムにどう対応するかが問題となった。強力なヨーロッパの近代国家システムに對抗できるような国家体制を築くことができなければ、ヨーロッパの植民地に転落する。ヨーロッパに對抗できるよう、いかに国力をつけ、国家体制を整備することができるか、各国の「近代化」が大きな課題となった。幕末における開国、それに続く明治政府の改革は、日本にとっては壮大な社会変革であった。欧米諸国が創り上げた近代国家システムに對し、立ち遅れた旧来の体制をいかに変革していくかが最大の課題であった。このように当時の日本の課題をとらえるならば、欧米諸国が創り上げた近代国家システムというものを、しっかりと学ぶ必要があると思う。

### 3. 日本史とヨーロッパ史の関連

中学校社会科歴史的分野において、世界史の領域、とりわけヨーロッパとの関係をどのように構成していけばよいであろうか。

まず近世について、近世は日本が初めてヨーロッパと接触し、交流が始まる時代である。日本はポルトガルやオランダなどを通じてヨーロッパの物産や知識に触れ、それを取り込んできた。とりわけ鉄砲は戦闘の形態を大きく変化させ、戦争の勝敗を左右するなど、日本の歴史に大きな影響を与えた重要な品目であった。しかしこの時期、ヨーロッパとの関わりは主に物産であり、日本に影響を与えるような思想・文化

はヨーロッパにおいてもいまだ形成されていなかった。そうした段階であるので、日本とヨーロッパとの関係でいえば、ヨーロッパ人が来航したこと、ヨーロッパとの接触が始まったことが重要な事項となる。このように考えると、ヨーロッパ人が世界に進出する背景となった、イスラムの拡大やモンゴル帝国の形成による世界貿易の広まりとヨーロッパの大航海時代が歴史の内容になると思う。

次に近代について、先に述べたように、幕末～明治維新の時代は、強大な近代国家システムを備えたヨーロッパが、その力を背景に日本に開国を迫った時期で、明治政府の緊急な課題はヨーロッパの近代国家システムを取り入れ、日本の社会構造を変革することであった。そうしたことを踏まえると、

## 4. 単元「ヨーロッパ社会の変革」

### 1. 単元の目標

ヨーロッパで構築され、明治政府が近代化の目標とした近代国家システムとはどのようなものかを理解する。

### 2. 単元計画 (全8時)

- |                      |           |
|----------------------|-----------|
| (1) ローマ教会とヨーロッパの王権   | (1時間)     |
| (2) 宗教改革             | (1時間) …本時 |
| (3) 絶対王政と国民          | (1時間)     |
| (4) 市民革命             | (2時間)     |
| (5) 産業革命             | (1時間)     |
| (6) ヨーロッパの世界進出とアジア諸国 | (2時間)     |

### 3. 小単元の学習内容

- (1) 中世のヨーロッパは国家としてのまとまりは弱く、カトリック教会が王権を圧倒し、全ヨーロッパに政治権力をふるっていた。
- (2) カトリック教会の介入なしに救済を唱えた新教を利用することで、カトリック教会の支配から離脱し、主権国家体制を整えようとする王権によって宗教改革がすすめられた。
- (3) フランスのルイ 14 世は家臣や人民を「フランス人」としてまとめることで、民族をもとにした国民国家が創り上げられた。
- (4) ①フランスでは、市民革命により、王権から権力を奪い、自由で平等な国民が国家の主権を担う、民主主義の政治形態を構築しようとした。  
②アメリカでは、本国の支配から逃れ、特権的植民者の支配を打破するために、人民主権をかかげて独立戦争（独立革命）を行い、アメリカ合衆国を建設した。
- (5) 産業革命により機械を用いた生産が始まり、生産力が大幅に向上するとともに、自由な経済活動が保障される資本主義経済が形成された。
- (6) ①インドに進出したイギリスは、インドを自国の綿工業のための原料供給地として、また商品の市場として組み込み、搾取を行う植民地として支配した。  
②イギリスは自国の商品の市場を拡大するために、当時鎖国をしていた中国（清朝）に対して、アヘン戦争をしかけ、中国の国内市場の開放を求めた。

### 4. 単元の評価規準

【社会的な事象への関心・意欲・態度】現在の自分や社会に関心を持ち、その有様を歴史的に考察していこうとする意欲とそれを批判的に考察しようとする態度をもち取り組んでいる。

【社会的な思考・判断】中世から近代にかけてのヨーロッパ社会という考察する時代および地域の時代的・社会的特質を踏まえたうえで、多角的かつ批判的に思考・判断することができる。

【資料活用の技能・表現】考察する時代および地域の資料から情報を読み取り、時代的・社会的特質を踏まえた

幕末～明治維新を学習する前提として、ヨーロッパの近代国家システムとはどういうものかを理解しておかなければならなくなる。ヨーロッパでは、ルネサンス、宗教改革、絶対王政、市民革命、産業革命など様々な変革を通してこのシステムが形成されたわけであるので、こうした出来事について、それぞれのシステム形成における意味を踏まえ理解することが必要であると思う。

以上のことを踏まえて、以下に近代における諸国との交流の事例として、ヨーロッパの近代化についての単元「ヨーロッパ社会の変革」を開発した。今回、その一部を提示することにする。

確な表現ができる。

【社会事象についての知識・理解】 中世から近代にかけてのヨーロッパ社会の変革について、その歴史的な過程と意義を理解している。

5. 小单元「宗教改革」の指導案

ルターの「九十五カ条の論題」が発端となって始まった宗教改革であるが、そこでは「信仰」という個人的な問題を中心にしながら、当時のドイツの政治問題に発展した。そして最終的には「各領邦の領主の信仰する宗教がその領邦の宗教となる」という極めて政治的な決着となった。この政治決着はなぜ生じたのか。当時のドイツの状況を考察することで、ローマ教会の支配からの離脱というドイツの課題を明らかにしていきたい。さらに、イギリスの宗教改革を取り上げ、イギリスにおいても全国支配を進めようとする国王にとって、その阻害要因になっているローマ教会やスペインなどの勢力を排除しようとする国王の意図を明らかにしていくことで、国民国家形成という政治的動きがあったことを理解させたい。

	発 問	教授=学習過程	資料	学 習 内 容
導 入	◎15 世紀ころのヨーロッパの政治情勢はどのようなものであったか。	T 発問する。 S 答える。		・ローマ教会が全ヨーロッパに勢力を張っていた時代から、各国で王権が伸長してくると、王権と教皇権の対立が激しくなってきた。
展 開 1	◎マルティン＝ルターとはどのような人物であろうか。  ・ルターは当時のドイツとローマ教会との関係をどのようなものにとらえていただろうか。 ・当時のドイツとローマの関係は、何と言われていただろうか。  ・以上のことから、当時のドイツとローマ教会との関係はどのようなものであったといえるか。 ・ルターがローマ教会に対する厳しい批判を公表した原因は何か。 ・ルターはどのような形式で抗議をしたか。 ・意見書にはどのようなことが述べられていたか。 ・ルターに対し、教会はどのような対応をしたか。	T 発問する。 T 説明する。  T 発問する。 T 説明する。  T 発問する。 S 答える。  T 発問する。 S 答える。  T 発問する。 S 答える。  T 発問する。 S 答える。  T 発問する。 T 説明する。	①  ②	・エルフルト大学に進学し、優秀な学生であったが、帰省から帰る途中、雷に撃たれたことで出家を決意し、修道院にはいり、そこで「祈祷、断食、徹夜、耐寒」など苦しい修行生活を送る。しかし、いかに厳しい修道の生活を送っても、神に救われるという確信が持てず苦悩していた。その後ウィッテンベルク大学に招かれ、論理学と哲学の講座を持つ。やがてルターは、人が正しく生き続けていれば、神はこれを認め、救ってくれると考え、「信仰」が大切であると確信するようになった。 ・ルターの著した『ドイツ国民のキリスト教貴族に与う』によると、ローマ教会が様々な手段を用いてドイツに介入し、ドイツの民衆から富を奪い取っていると、ローマ派の人々を「盗賊」と評している。 ・当時のドイツとローマ教会の状況については、「ドイツはイタリアの牝牛」という表現がなされていた。これは、ドイツがイタリア（ローマ教会）から厳しく搾取されていた状況を言い表したものである。 ・ドイツにはローマ教会からの介入・干渉が激しく、ドイツはローマ教会に多くの富を奪われ、食いにされていた。  ・教皇レオ 10 世がサン＝ピエトロ大聖堂修築の資金集めのために、ドイツで免罪符の販売をしたことが原因であった。 ・ルターはウィッテンベルク大学の教会の扉に 95 か条におよぶ意見書を公開することで抗議した。 ・意見書にはルターの宗教的立場からローマ教会を厳しく批判する内容が述べられていた。 ・ローマ教会はルターを審問し、ルターを破門した。

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ルターはどのように対応したか。</li> <li>・ルターはローマ教会を批判し、どのようなことを主張したか。</li> <li>・ドイツの国民はルターとローマ教会との争いにごう対応したか。</li> </ul>	<p>T発問する。 T説明する。 T発問する。 T説明する。</p> <p>T発問する。 S答える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ルターは破門に屈せず、当時発明された印刷技術を用い、自説を広く国民に知らせ、ローマ教会と争い続けた。</li> <li>・人間が救済されるためには、善行や功徳を積まなければならない、教会の施す伝統的な秘蹟が人を「義なる人(正しい人)」にすると説く教会に対し、ルターは人間が救済されるためには、善行・功徳ではなく、神の愛にすがることができるしかなく、信仰において万人は平等であり、教皇は特別の人間ではない、聖書こそが神の言葉を記したもので、信仰の寄りどころとなると説いた。そしてローマ教会による救済行為や、神と人の間に立つという教会の存在意義を否定した。</li> <li>・国民の多くはルターを支持した。</li> </ul>
展開2	<p>◎多くの国民がルターを支持する中、ドイツ国王(神聖ローマ皇帝)はどのように対応したか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・神聖ローマ皇帝とはどのような存在であったか。</li> <li>・カール5世(ハプスブルク家)とはどのような人物であったか。</li> <li>・ドイツ皇帝とローマ教会との関係はどのようなものといえるか。</li> <li>・ドイツの貴族(諸侯)はどのような対応を取っただろうか。</li> <li>・その後ドイツの政治状況は怎么样了だろうか。</li> <li>・ルターの唱えた新しい宗派は何と呼ばれたか。</li> </ul>	<p>T発問する。 T説明する。</p> <p>T発問する。 S答える。 T発問する。 S答える。</p> <p>T発問する。 S答える。</p> <p>T発問する。 S答える。</p> <p>T発問する。 S答える。</p> <p>T発問する。 S答える。</p>	<p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・神聖ローマ皇帝カール5世は、ルターをウォルムスに開いた帝国議会にルターを呼び、ルターが出した論文や意見書の撤回を求めた。しかしルターが自説の撤回を拒んだため、ルターの法による保護を解く措置を取った。</li> <li>・ローマ教皇よりローマ帝国皇帝の冠を授かったことで、歴代のドイツ国王は「神聖ローマ皇帝」を称していた。</li> <li>・カール5世はネーデルランドに生まれ、スペイン国王となり、さらに神聖ローマ皇帝の位を授かった王で、一族のハプスブルク家は、オランダ、スペイン、ドイツ以外にもハンガリー、ボヘミア(チェコ)など国の枠を超え、ヨーロッパ全体に所領を領有する皇帝であった。</li> <li>・ドイツ皇帝とローマ教会との関係は、ともにヨーロッパ全体に支配を広げようとする存在として結びついていた。</li> <li>・神聖ローマ皇帝に反発する諸侯も多く、その一人であるザクセン公がルターを自らのワルトブルク城にかくまい、保護した。</li> </ul> <p>④</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ドイツでは皇帝に味方する諸侯は旧教を、反対する諸侯は新教を領邦内の宗教としたことで、ドイツは皇帝支持派と反皇帝派の二つに分裂し、両者は厳しく対立した。</li> <li>・ドイツ皇帝に反発する諸侯はルターの唱えた教義を信奉し、対抗したので、プロテスタントと呼ばれた。</li> </ul>
展開3	<p>◎イギリスで始まった宗教改革はどのように展開をしたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・イギリス国王はローマ教会との対立をどのように解決したか。</li> </ul>	<p>T発問する。 T説明する。</p> <p>T発問する。 T説明する。</p>	<p>⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英王ヘンリー8世は王妃カサリンに女子しか生まれなかったため王妃と離婚し、別の女性と結婚しようとした。しかしカサリンはスペイン王家の出身であり、ローマ教皇はこの離婚に反対したため、ヘンリー8世はカンタベリー大司教にクラマーを任命し、離婚を強行した。</li> <li>・ヘンリー8世は、「首長令」を発表し、イギリスの教会組織の首長にイギリス国王が就くことによって、イギリスの教会組織をすべてイギリス国王の配下におさめ、イギリス国教会を立ち上げた。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イギリス教会とローマ教会の違いは何か。</li> <li>・イギリスの宗教改革について、ドイツの宗教改革とどのようなことが共通点としてあげられるか。</li> </ul>	<p>T発問する。 T説明する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・後の王が教義や儀礼などに新教の考えを導入し、ローマ教会とは異なる教会組織をつくりあげた。</li> <li>・両国とも、宗教改革の目的が、ローマ教会およびハプスブルク家という国外の勢力の介入を除くことを政治目的として宗教改革が展開した。その過程でローマ教会およびハプスブルク家が唱えるカトリック教(旧教)と断絶し、旧教に対抗するために、旧教とは異なる新教を国教としたことが共通点としてあげることができる。</li> </ul>
展開4	<p>◎その他のヨーロッパ諸国はどう対応していたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オランダはどうであったか。</li> <li>・フランスはどうであったか。</li> </ul>	<p>T発問する。 T説明する。</p> <p>T発問する。 T説明する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オランダはスペイン(ハプスブルク家)の支配に反発する新教徒の貴族を中心に市民がまとまり、スペインからの独立戦争を始め、イギリスなどの支援を受けながら、スペインから独立を達成した。</li> <li>・仏王は商人と結んで王権を伸長させたため、アナーニ事件などを通して、フランス国民教会が形成されていた。フランス王権はこれに加えて、「王権神授説」を唱え、ローマ教会を介在させずに、直接王権と神を結び付けようとする考え方を主張していた。</li> </ul>
終結		Tまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヨーロッパ全体に勢力を張っていたローマ教会に対し、国内の諸侯に対しこれを圧倒するほどに国王が力をつけてくると、ローマ教会やハプスブルク家など外国勢力の介入や干渉を排除し、国王が国内の諸侯・教会を束ねようとする動きを強めてきた。ルターの宗教改革は、こうしたローマ教会からの離脱を目指す各国王にとって、カトリックに対抗できる思想としてされ、新教を導入することで、国内の教会をローマ教会の組織から切り離し、ローマの支配から逃れることに成功した。このようにルターという個人の信仰に基づいたローマ教会との争いは、当時の政治情勢の下、個人の信仰という枠から大きく離れ、政治と深くからみながらヨーロッパ各地に広まり、カトリックと並ぶ一大勢力となっていく。</li> </ul>

【資料】

- ①『ドイツ国民のキリスト教貴族に与う』からの抜粋資料(参考文献②より作成)
- ②『95か条の論題』の抜粋資料(参考文献②より作成)
- ③16世紀中ごろのヨーロッパの勢力地図(「ニューステージ世界史詳覧」(浜島書店) p 154)
- ④ドイツを取り巻く国際情勢の概念図(省略)
- ⑤イングランド王家の家系図(「ニューステージ世界史詳覧」(浜島書店) p 156)

【主要参考文献】

- ①「世界史リブレット 27 宗教改革とその時代」小泉徹(山川出版社)
- ②「世界の名著 23 ルター」責任編集 松田智雄(中央公論社)
- ③「世界史リブレット 29 主権国家体制の成立」高澤紀恵(山川出版社)
- ④「世界史リブレット 30 ハプスブルク帝国」大津留厚(山川出版社)
- ⑤「世界の歴史 12 ルネサンス」金田雄次他(河出書房新書)
- ⑥「世界の歴史 13 絶対君主の時代」今井宏(河出書房新書)